
銀河お気楽伝説

無理無理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河お気楽伝説

【Nコード】

N68680

【作者名】

無理無理

【あらすじ】

宇宙局特別遺失物搜索課。それは古代の文明の科学技術？ロストテクノロジー？を探だし、回収するために作られた部署である。しかしロストテクノロジーが早々見つかるわけ無く、普段は雑用などいろいろな仕事をしている。ほぼ名ばかりである。それにより人々はそこをこう呼ぶのである。お気楽課、と。

プロローグ

宇宙暦204年。

人類は滅亡の危機にあった。

外宇宙からの侵略である。ケネリミールと名乗る侵略者達は次々と人類側の星を攻め込み、人類は追い詰められていた。

人々は絶望した。私たちはもう助からないと。

しかし神は人類を見捨てなかった。

6人の勇敢なパイロットと戦艦エルセラーズによって戦況は一変。

人類は戦況を5分5分にまで持ち直し、最終的には同盟を結ぶことに相成った。

幸いなことにケネリミールと人類の外見は耳の形と額の文様以外は似ており、意外とスムーズに双方は和解していった。

しかし戦火による被害を被った人々はそうそうに納得などできるはずもなく、終戦から2年後、またもや戦争が勃発した。

三つ巴になったこの戦争は大きな被害こそなかったものの、確実に人々の精神を摩耗させていった。

それでもまた6人の勇敢なパイロットと戦艦エルセラーズの活躍によって、戦争は終結した。

そして現在はミリネリド・アース^M暦52年。

戦争から50年たった今。

世界は平和そのものであった。

しかし、それでも平和は乱れるのである。

でも、このお話にはそんなことは関係なく。

このお話は、宇宙局特別遺失物搜索課、通称お気楽課。

そこに所属する5人と1体の話である。

第一話 探すという行為は命がけである（前書き）

笑って楽しんでいただけたら幸いです。

第一話 探すという行為は命がけである

M・A暦52年

ケルセイナ星系第4惑星？ミナカリス？

ここにある宇宙局特別遺失物搜索課、通称？お気楽課？から話は始まる

十

宇宙局特別遺失物搜索課、通称？お気楽課？。

今ここはとても警察内部とは思えぬほど賑やかだった。というかぶっっちゃけ遊んでいる。

そんな中一人の女性が中に入ってくる。

「はい、お前らよく聞けー」

わいわいがやがや

しかし誰もそんなことなど聞かず、遊びまくっている。

「・・・おい、お前ら」

わいわいがやがや

誰の話も聞かないこの状況に女性は肩を震わせ・・・

ぶちっ

「聞けっつてんだろぅが、この大ボケ共がッ!!」

ドガッ!

静まる室内。

女性が力任せに叩いた壁には亀裂が走っている。

その有様が拳の威力を物語っているようだ。

「こほん。貴様らに仕事だ。どうやらロストテクノロジーらしき反応が見つかったらしい。今回の任務はそれの搜索及び回収だ。何か質問は？・・・ないな？それでは特別遺失物搜索課、出勤せよ」

「『了解！』」

+

現在地、コーネリアス星系第2惑星フィナチア付近。

宇宙船グリック内部。

「やれやれ、今回もやはりロストテクノロジー探しか」

そう言ったのは髪を後ろで一纏めにした紅い髪の女性。

彼女の名前はリリス・エスコット。

少しイライラとしている感じで、どこか男っぽい雰囲気がある女性である。

「まあ、お気楽課はそういう探し物をするために作られた部署だからにや〜」

リリスに答えたのはイスに手を頭の裏で組んで寄りかかっている薄い水色の髪をした少女。

彼女の名前はナナミア・エルモ。愛称はナナ。

軽そうな言葉で喋る明るい雰囲気少女である。

「それにしてもまさかこんな辺境まで来るとは思いませんでしたわ」

愚痴をもらすのは金色の髪をした女性。

彼女の名前はキリカ・H・アシュハールト。

まるで貴族のような印象を受ける女性である。

「まあ、それもいつものことといえばいつものことですけどね」

愚痴に答え、ため息を吐くのは緑色の髪をした少女。

彼女の名前はエル・ミナカミア。

頭のよさそうの感じのする少女である。

「じゃあ、パパーッと終わらせて皆でどこかで遊んでいきませんか？」

今までの流れをぶつちぎるような発言するのはピンク色の髪をした少女。

彼女の名前はミリエーヌ・白河。愛称はミリー。

能天気な雰囲気がある底抜けに明るそうな少女である。

『皆さん、もう少しで目的地に着きます。そろそろ準備をしておいてください』

そう言うのは銀色の髪をしたどこか機械的な女性。

彼女の名前はS E - L i e s - 5 1 7 - 4 0 8 2 6。通称セリエス。

彼女はいわゆるガイノイド。しかし見た目的には普通の人と変わらないのでだれもガイノイドだということは気にしていない。

『まもなく到着致します。皆様は席にお着きください』

セリエスの声で全員が席に座る。

『それでは大気圏を突破し、地上に着陸します・・・、あ』

「「「「「・・・あ？」「」「」「」

セリエスは口を半開きにしたまま後ろを振り返り皆に顔を向ける。

『・・・一昨日に整備したときに旅雑誌を見て旅行に行こうとしていたので、つい旅行整備にしたのを忘れていました』

「？それが何か問題があるの？」

深刻そうに喋るセリエスに聞き返すミリィ。

『つまりですね』

「つまり？」

『整備されていない星に対しての大気圏突破は事実上不可能、という事です』

しゅん

「・・・は？それはつまり」

「もしかなくても？」

「そういうこと・・・、なんですか？」

「そういうこと、なんででしょうね」

『はい、そうゆうことです』

「え？え？どうゆうことなんですか？」

一人だけ事情がわかっていないミリーはあたふたしながら周りに問う。

『簡単に言いますとこの船はもう間もなく墜落します』

「あ、そうなんですか……。つて、ええええええええええ！？」

今更のよつに慌てるハリー。

「ってあれっ？皆さん何故にシートベルトをしつかりと締めているんですか？あ、そっか。墜落のシヨツクに備えているんですね。・・
・って、私も——」

ど
が
ー
ー
ー
ん
!
!

†

「うーん」

ふらふらと起き上がるのはミリである。

あの衝撃で無傷とは、正直いつて運が良いというレベルではない。

「あ、ようやく起きた」

「あれ、ナナさん？」

まあ、当たり前だが他の皆はもう起きている。

というか気を失っていたのはミリーだけである。

「ああ、ようやく起きたのか。では、早速で悪いが出発するぞ」

「出発？どこに？」

「何を言っている。私たちがここまで来たのは何のためだ？」

「？旅行しに……」

「違う！ロストテクノロジーを探しに、だ」

「……、ああ！」

相変わらずポケポケのミリー。

任務をこつも簡単に忘れる彼女はこつやってこの職に就けたのだろ

うか？

『では私はグリユックを直しておきますね』

「よろしく願いますわ」

「では出発しよう」

「は～～い！」

+

「本当にこつちでいいのか？さっきから同じところをぐるぐると回っているような気がするんだが・・・」

いやになるほど大きな森の中を進んでもう3時間は過ぎたころだろうか。さっきから進んでいない気がしたりリスはエルに尋ねる。

「ええ。センサーを見る限りはこの方向で合っているはずです。」

「でもさつきもこの花を見たような気がするんですけど」

そう言ってそばにある大きな黄色い花を指差すナナ。

「あれ？その花って確かマナケミアっていう・・・」

かぶり

「かぶり？」

ナナの頭に齧り付いている大きな黄色い花。

「・・・食人植物だったような？」

「・・・それはもうちょっと早く言ってほしかったなあ」（だらだらー）

齧り付かれたまま頭から血を流す笑顔のナナ。

「だ、大丈夫か？なにやら急激に顔色が悪くなっているが・・・」

「心配する暇があれば助けろや!!」

「あ、そんなに怒ったら・・・」

「あ（ぴゅーっ）」

頭に血が上ったために一気に血が抜けたナナはそのままゆっくりと
天に召されていき「——ませんわ」

そう言ってエリカはナナの頭を食人植物から取り出す。

すぽんっ

「・・・まったく。これが俗に言う喋る前に手を動かせ、ですね」

「違うと思います」

「これって意外と噛み付く力がなかったんですね（ちょんちょん）」

「・・・お前はよくこんなのに触れるな」

恐れなど知らぬとばかりにさっきまでナナに噛み付いていた花を突
付くミリーを呆れた顔で見つめるリリス。

「でもこの花って普通は群生しているらしいんですけどね」

・・・。

「そういうのはなるべく早く・・・」

「言っしてほしいですわ・・・」

キシヤアアアッ！！

5人の後ろには何十という数の食人植物が。

「は、ははは。洒落にならんほど居るんだが・・・」

「ナナさんを連れて早く、・・・あら？」

ナナの倒れていたほうを見るがそこには誰も居らず。

ちゃんちゃん

「ん？」

「あれ」

そう言ってエルが指差すほうを見る。

ダダダダダダッ！！

その方向には全速力で逃げるナナの姿が・・・。

「い、いつのまに・・・」

『皆さんのことは決して忘れませんよー！ー！』

「こらー！勝手に一人で逃げるなー！！」

そのナナに向かって怒鳴るリリス。

「・・・ナナさん、ありがとうございます。あなたのことは決して
忘れません」

「で、あなたはなんで逃げるナナに向かつてお礼を言っているのかしら?」

「だってマナケミアって動く生物に反応して獲物を追いかけるんですよ?」

┐
┐
┐
•
•
•
•
┐
┐
┐

「おおあああ！？なんでこっちに来るんですかあっ！？こ、来ないでええええええええ！！？」

「・・・自業自得ですね」

「なむ」

『ひゃああああ!？あ、あぶつ!？た、助け——』

ぱくっ、くぐり。・・・げえつぶ。

「・・・食べられちゃいましたね」

「・・・そうですね」

「「「「・・・」」」」

「い、急いで救出!」

「「ら、ラジャー!」」

「了解です!」

+

「はあ、はあ。し、死ぬかと思った」

急いで助け出したナナはマナケミアの溶解液によってベトベトになっており、服も少し溶けていた。

「一人で逃げるからそんなことになるんだぞ？」

「それは反省してます」

泣きながら謝るナナ。

「そういえばまだロストテクノロジーのあるはずの場所までつかないのか？」

「もう何だかんだで結構な時間がたっていますしね」

「そろそろ帰らないと夕食の時間までに帰れませんわ」

しかし誰も聞いていなかった。

「しどいです〜（しくしく）」

「いえ、それなんですが・・・」

「どうしたんだ？」

センサーを見ながら少し困ったような表情を浮かべるエルに尋ねる
リリース。

「その・・・、ロストテクノロジー反応がこちらに向かって急激に
近づいてきているんです」

「なんですって？」

「もしかしてアレじゃないですか？」

「んん？」

ぎゅぎゅぎゅぎゅっ・・・

「いや。あれじゃあないだろ・・・」

「ええ、本当に。まったくもってその通りですわ」

「ええ？でもあのなんかさっきまでのマナケミアの十倍くらいはありそうなかさのマナケミアしかこちらに向かって急激に近づいてきているのありませんよ？」

・・・。

「そ、そんなわけが無いだろ！」

「そ、そうですね！きっと地下からきているとか、空から来ているとか・・・」

「残念ながらアレからロストテクノロジー反応がします」

・・・。

「ま、またこんな展開なんですかあゝ？」

「だが今回は誰も動いていないぞ!？」

「おそらくアレがロストテクノロジーを食べたことにより、より高度な生き物に進化したんでしょう」

「ということは逃げないと皆まとめてあのビッグマナケミアの胃袋の中ってことですね？」

・・・。

「み、皆走れー!？」

「「「ラジャー!！」」」

ダダダダダッ!!

「あ、皆!? 私まだ動けないんですけ——」

ぱくりっ。むしゃむしゃ。・・・くん。

「あはははは！またナナさん食べられちゃいましたよ」

「ナナ、あなたの犠牲は忘れませんわ。・・・三日ほど」

「そうだな、私は彼女の勇気を忘れない。・・・四日ほど」

「まあ、そう言いつつも逃げているんですけどね」

<私はまだ死んでいなーい！？>

「何か後ろからナナさんの声のようなものが聞こえる気が・・・」

「それこそまさしく幻聴ですわ！！」

「その通りだ！ナナは死んだんだ！現実を見ろ！！」

<だから死んでないってばー！！！>

「あゝ。やっぱりナナさんまだ生きているんじゃない？」

「気のせいだ！だから私たちは彼女の分まで生きるために逃げ続けるんだ！！」

「その通りですわ！私たちは明日に向かって走るんですの！！」

「どうやら食べられてもしばらくは生きていられるようですね」

キシャアアアアアア！！？

「気のせいかどんどん近づいてきてませんか？」

「なに！？いや、まさかそんなことあるわけがないだろう！？」

「気のせいですわ！気のせいなんですわ！？」

「いえ、確かに近づいてきて、あ——」

ぱくりっ

†

かー、かー、かー。

『……遅いですね皆さん』

†

そして胃袋の中

「あ、骨が落ちてますよ」

「あーそうかい」

「後どれくらい持つんでしょうかね・・・」

「少し服が溶けてますわよ」

「お腹が減りましたね」

・・・。

「誰か助けてくださーい!」
「」
「」
「」
「」

この後、様子を見に来たセリエスによって救出されました。

第二話 大変だとわかっていてもお金は欲しい

本日もお気楽課はのほほんとした1日を過ごしていた。

しかし、ナナが見つけた一つの新聞から事態はとんでもない方向へと動いていったのである。

+

「た、大変です！皆さーん！！」

大きな足音を響かせてナナは走ってくる。

「おー、ナナどうした？そんなに急いで」

「そんなに急ぎますと転びま——」

「あっ」

ガッ！ゴロゴロゴロゴドガー——ン！！

「——すわよ、って見事に転びましたわね」

「まあ、見事にフラグ立ってましたからね」

「……、誰か私の心配をしてくれても良いじゃないですか……」
「」

頭をさするナナは恨みがましそうにお気楽課の面々を見る。

「大丈夫だと信じていたんですわ」

『あなたの頑丈さは常人の比ではないですからね』

「なんか馬鹿にされているような……」

「それで話って何でしょうか？」

「あ、そうでした」

そう簡単に話をすり替えられるから馬鹿扱いされるんじゃないのだからか・・・？

「これ！これを見てください！！」

なぜか興奮しているナナが取り出すのは一つの新聞。

「これが一体どうし・・・」

「どうしたんです・・・の・・・」

ナナが持っている新聞を見た瞬間に時が止まる二人。

「あら、これって」

『どうみてもミリーさんですね』

そう。新聞に貼つてある写真に写っていたのはどう見てもミリーであつた。しかし・・・。

「でもこの記事が書かれた年が今から30年前になってますよね？」

「そうなんですよ！そこが不思議なんですよ！」

「でもどうして30年前の新聞なんか持っているんですの？」

「ああ、それはですね。これに載っている4コマ漫画の奇想天外がきくけこっぽーちゃんがどこから掲載されているのが急に気になっちゃいまして、古本屋で立ち読みしていたんです」

「なんだそのさっぱり中身がわからない題名は……」

「……時間になつてもここに来ないと思っていましたら、そんな所へ行っていたんですか」

ニコニコと笑顔で喋るナナに変なやつを見る目で見つめるリリースと呆れるエル。

「しかしこれがいったいどうしたって言うんですか？」

「え？だって気になるじゃありませんか。どうしてここまでミリーさんにそっくりな人が新聞に載っているのか」

『確かに気にはなりますが……、別にどうしても気になるというわけでは』

「えー？気になりますよ、絶対！」

興奮して新聞を握り締めるナナ。

力を込めすぎて新聞が少し破れかかっている。

「皆さん。おはようございます」

と、そんな時ミリーがお気楽課にやって来た。

「あれー？皆さん一体どうしたんですか？一箇所に集まって」

「あ、ミリー。ちょっとこれを見てよ！」

「これ？」

ミリーに新聞を突きつけるナナ。

「これって・・・」

「ね？ミリーにそっくりで——」

「お母・・・さん・・・」

「——え？」

「お母・・・」

『さん……ですか?』

「……はい」

顔からキラリと光るものが落ちる。

「もう、他に写真なんて残っていないと思ったのに……」

「そう、なんですか?」

「はい。私の母は私が3歳のときに死んだんです。その後親戚の人の養子になったんですけどそのときにいろいろあって母の写真が私が肌身離さず身につけている一枚以外なくなってしまったとばかりに……」

新聞を抱きしめるミリー。

「え、なに?この意外と重い過去」

「とゆーかこれはまだ2話目なのにいいのだろうか?」

『ギャグ小説ですから問題無しです』

「ぶっちゃけましたね、セリエスさん」

「・・・、シリアスが台無しですわ」

・・・あんまりメタなことを喋らないでほしいんだが。

「そしてこれが母の形見なんです」

ミリーが制服の内側のポケットから取り出したのは小さなロケット。

「これが、ですか？」

「はい。ほら、中に・・・」

ミリーがロケットをずらすと中にはミリーの面影がある女性と小さな赤ん坊が写った写真があった。

「この人がそうなんですか？」

「はい、そうです」

「綺麗な人ですわね」

「そうですね」

ロケットの中身を見て口々に感想を言うお気楽課の面々。

「あれ？」

「どうしたんですか？リリスさん」

「いやほら、ここなんだけどさ。なんかずれるようになってる気がするんだが・・・」

「え？」

リリスが指差したところ、ロケットの裏をよく見てみるミリー。

「ほ、本当です。ここ、なんかずらせます」

「何か入ってないの!？」

何か興奮した様子でミリーに尋ねるナナ。

「えーとですね。あ、なにかのチップが入ってます」

そう言ってロケットの裏からなにかのチップを取り出す。

「これは・・・、一昔前の記録媒体ですね」

『ミリーさん。再生いたしますか？』

「・・・。お願いします」

+

「これは・・・、地図ですわね？」

ロケットの中のチップに入っていたデータはどこかの星の地図であった。

「なんでしょうかね、これ？」

『私が判断します限りこれは宝の地図だと思われます』

・・・。

「「「「た、宝の地図うー!?!」「「「「「

セリエスの言葉により、一気にざわめき立つお気楽課の人々。

「な、なんで宝の地図だと・・・?」

『これを見てみてください』

セリエスを取り出したのは先ほどの新聞紙。

「これがどうかしたんですの?」

『この記事を見てください』

「ん?」

「何々?? またもや大発見!?! トレジャーハンターのアーリエス・白河さんがまたもや新しい遺跡を? って、何だと!?!」

「ミリーのお母さんはトレジャーハンターだったの!?!」

「し、知らなかったです」

新聞に書かれている記事に目を見開くミリー達。

「ですがこれと、その地図が宝の地図だという関連性はないのでは？」

『いえ、これを見てください』

セリエスは地図に描いてある×印の場所に指を置く。

『明らかに何かがあるという証拠です。そしてミリーさんの母親がトレジャーハンターだったということならば・・・』

「そこには何か宝があるのはある意味当然、ということか」

『その通りです』

その話を聞いてお気楽課の面々（ミリーを抜く）は想像する。

そんなお宝があるのなら取ってこよう、と。

トレジャーハンターが残した地図ならばきっと莫大な金銀財宝がありそうだ。

しかしそれはある意味ミリーの母親が残した形見みたいなものである。

だとしたら……。

「「「「「……」」」」」

がしっ

お気楽課（ミリーを抜く）の心が1つになった瞬間である。

（お宝はちゃんと6等分だぞ！）

（当たり前ですよ。抜け駆けなんてとてもとても）

（ですがその前にミリーさんを説得しなければなりませんわ）

（……、私がやってみます）

《大丈夫なですか？》

（任せて）

皆の視線を背中に受けて、エルは一人地図を見つめているミリーに近づく。

「ミリーさん」

「ふえ？」

「お母様の形見。取りに行くんですよね？」

「！？な、なんでわかるんですか！？」

（ ）（ ）（ ）《いや、まるわかりだから》（ ）（ ）（ ）

あまりにもわかり易すぎるミリーの心に対しての総突っ込みである。

「・・・そうです。明日にでも一人で取りに行ってこようと思っています」

ミリーはどこか遠くを見つめながらエルにそう告げる。

「ミリーさん。一人で行くなんて言わないで下さい」

「え？」

「だって私達、仲間じゃないですか」

「!?!」

エルの言葉に目を見開き薄らと涙を浮かべるミリー。

そしてエルはミリーの後ろ——要するにお気楽課の面々——を見る。

（援護を求む）

（（（《ラジャー!》）））

エルのアイコンタクトを受けた皆はミリーに止めを刺すべく一気に攻める。

「そうだ、ミリー。私達は仲間じゃないか」

「……リリスさん」

「困ってるんなら協力するよ！」

「・・・ナナさん」

「あなたがお母様の形見を手に入れたいのなら一緒に困難に立ち向かいますわ」

「・・・キリカさん」

『私も及ばずながらお手伝いさせて頂きたいと思っております』

「・・・セリエス」

「（ここが決め所！）ほら、皆あなたのことをこんなにも考えているのよ？だから私達もあなたのお母様の形見を探すのに協力させていただけませんか？」

「・・・エルさん。みなさあん、ありがと、う、うっええええん！」

皆の心からの言葉によって涙腺が完全に崩壊してしまうミリー。
金がほしい

「ということでミリーさん。ついになにかお金になりそうなものがあつたら貰ってもよろしいですか？」

「ふえ？ま、まあ形見以外でしたら別にいいですけど・・・」

「「「「『よっしゃああああー!』」」」」

「・・・よっしゃあ?」

つつい喜びの声をもらしてしまった皆。

「おほほほ!なんでもありませんわ!」

「そうそう!そうと決まったら早速出発しよう!」

「え?でも今日はまだ仕事・・・」

「気にしない気にしない」

『安心してください。今日の仕事はもうありません』

「ということなのでさっさと行きましょう」

皆にせつつかれてお気楽課を去るミリー。

「い、いいのかなあ?」

+

皆が出て行った少し後、一人の女性がお気楽課の部屋に入ってくる。

「お気楽課、仕事だ・・・ぞ・・・?」

口にくわえていたタバコをぽろつと落としてしまう。

「だれもないだと?・・・ん?」

ふと、セリエスの机に置いてあった1枚の紙が目に入る。

「なにになに???宝探しに行つて来ます。帰りはウハウハの予定なのでしばらく帰つてこないと思います。ヒヤッホー!!!?だとお・・・!」

女性の頭に多数の血管が浮かび上がる。

「あ、あいつらぁ――――！！！！」

+

『書置きをちゃんと読んで下さいましたでしょうか・・・』

ちなみにセリエスがあの手置きを置いたのは純粹に心配をかけさせまいと云うことである。

「ところでこの地図の場所はわかっているんですの？」

「ええ。場所はガグリダス星系第5惑星の衛星の1つ、ケルムクです」

「ケ、ケルムクだとお！？」

エルの告げた場所を聞いた瞬間リリスが怯えた声をだし、体を震わせる。

「その星がどうかしたんですか？リリスさん」

「昔聞いた話なんだが、ケルムクという星は特殊な気候をしているらしい。しかもその所為で星の周囲の磁場が狂っているので精密機器が尽く壊れ、そこに行ってもものは帰った者はいないらしい」

リリスが真剣な表情で語ったことはあまりに恐ろしいことであつた。

「でもミリーの母さんは行つて帰つてきてるじゃん」

「うっ、まあそうなんだが。なにぶん聞いた事があるだけだからな・
・」

容赦なくナナに突っ込まれて少しひるむリリス。

『しかしあそこの周辺では精密機器は特殊なコーティングをしていなければ例外なく壊れてしまうそうです。もちろん宇宙船のも』

「え、この船は大丈夫なの？」

『それについては安心してください。仮にもこの船は遺失物搜索のための船ですから、そういう特殊な状況下でも大丈夫のように整備されています』

自信満々に胸を張って言うセリエス。

「でも前は堕ちましたよね」

『うぐづ。あ、あれはその、旅行用にしたために快適度が上がった代わりに船の力が下がってしまっただけですよ・・・』

「まあ、確かに今回よりは前回のほうが圧倒的にサービスが充実していたわね」

「といってもそれじゃあ本末転倒なわけなのだが」

『うぐぐう』

褒められたと思った瞬間に、どん底まで落とされたセリエスである。

「あ、見えました！見えてきました！」

「え、マジ？・・・あ、本当だ」

「意外と綺麗な星ですね」

「なんだと!？」

「私も見たいですわ!」

『……』

星が見えた瞬間に放置されたセリエスは少し寂しそうな顔をしている。

『……では着陸しますがしっかりと座っててくださいね。磁場の影響で結構揺れると思われますので』

「はい」

返事したのはミリーだけで、他の面々はすでにしっかりと席に座っていた。

『……皆さん早いですね』

「で、ここがそうなのか」

「・・・寂しいところですね」

星に着いた一行の目の前に広がるのは――

「岩しかないっすね」

『文字通り断崖絶壁というやつでしょうか？』

「違います」

周りにあるのは、岩。砂。土。

草木など一片も生えていない不毛の大地であった。

「確かにこんなところならなにかを隠してあったとしても、取りに来ようとする気すら起こらないな」

「で、でも私は行きますよ！絶対にお母さんの残したものを手に入れるものまでは！」

星の状況に少し怯んだミリーではあるが、勇気を込める意味も含めて改めて宣言する。

「そうだ！私たちも一緒になってお前の母の形見を手に入れるために協力するからな！」

「そう！あなたのお母様の形見を手に入れるためにですわ！！」

私の金銀財宝

「皆さん・・・、はい！」

明らかに欲望を隠しきれていない二人の言葉に感動するミリー。

・・・人がよすぎるぞミリー。

「それでは行きましょうか」

十

「ほ、本当にここがその、ミリーさんのお母さんが示した場所なん

ですかぁ・・・？」

「地図によれば確かに」

ナナが指差すその先にあるのはまさに地獄への入り口のような洞窟。入った瞬間に呪われそうなほどの不気味さに溢れている。

『とりあえずさっさと行きましょっか』

「そうですね！」

すたすたと洞窟の中に迷い無く入っていくセリエスとミリー。

「そうよね金銀財宝だもんね！」

「セリエスなんぞに独り占めなどさせんわ！」

「前進あるのみですわ！」

「出発です！」

そして四人はミリーたちを追いかけようと洞窟の中に足を踏み入れ

どがんっ!!

入り口に仕掛けてあった罠にはまり、見事大岩の下敷きに。

「こ、こんな所にあるなんて・・・!」

「なぜあの二人は無事だったのでしょうか・・・?」

そのころ先に進んだ二人はというと・・・。

「?何か後ろで大きな音が・・・?」

『気のせいですよ』

「・・・そうですよね!」

何事も無く洞窟の奥へと進んでいた。

《しかしやっぱりミリーさんの運は果てしなくついていますね。ま

さか私のようにセンサーで罠を発見して避けているわけではなく、
ひたすらに運だけで罠を回避していますね《

「お、っと」

ガコンッ

『て、ガコンってまさか』

パカッ

『な、なんでこうもピンポイントに私のしたの床があああああ
！！！っ』

ミリーが踏んでしまった罠のせいで、憐れセリエスは地中へと消え
ていってしまうのであった。

「あ、あれ？セリエスさん？どこに行っ たんですか・・・？」

急に消えてしまったセリエスを心配するミリー。

あんたのせいでセリエスは消えたんだよ。

「そういえば他の人も・・・」

今更になって他の人がいなかったことに気づくミリー。

「まあ、いいか」

が、そんなことを気にするミリーではなく、とつと先に進むのであった。

+

そして、のっけから罨にはまった四人は、奥に入るたびにどんどん激しくなる罨を何とか切り抜けながら、洞窟内を進んでいた。

「岩に矢、水と続いて・・・」

「さらには落とし穴はもちろん火炎放射などがありましたわ・・・」

「なんだかわからない牛の大群やら雷なんかもあったよね・・・」

「まさに罫のオンパレードですね・・・」

まさしくぼろぼろという言葉が相応しいくらいにぼろぼろになりながら。

傷らしい傷は全くといっていいほど無いのだが・・・。

がた、がたがたがたっ

急に目の前の床が音を立ててきしみだす。

「ま、またなにかの罫ですよ!？」

「こ、今回はなにも弄っていないはずだぞ!？」

「もういやですー!-!-!」

怯える皆の目の前でついに床がせりあがる・・・!!

『あー、死ぬかと思いました。ガイノイドですけど』

「「「はい?」「」」

「これは驚きの展開ですね」

床の下から上がってきたのはさきほどミリーに落とされたはずのセリエスであつた。

『まさか落ちた先が魔界に通じているなんて思いもしませんでしたよ・・・』

「セリエスさん」

『はい? あ、皆様ここまで来れたんですね。かなりぼろぼろみたいですけど』

「あんたも人のこと言えないほど、ぼろぼろだろうが・・・」

セリエスの体も他の四人に負けないほどぼろぼろであつた。

しかしやはり傷らしい傷が無いのが不思議である。

「セリエスが床から出てきたのは置いて、ミリーはどこに行ったの？まさかもう先に・・・？」

『多分その通りだと思います。私がここに落ちてからすでに10分は経っていますので』

「くっ、やっぱりそうか！こうしちゃ居れん、私たちもミリーを追っぞー！！」

「「「『ラジャー！！』」」」

ミリーに追いつくべく走り出す五人。

『あ、そういえば・・・』

「ん？どうした、セリエス」

走り出してすぐに止まるセリエスに走りながら尋ねるリリス。

『いえ、安易に走り出したらすぐ罠にはまるかと——』

かちっ

「そういうことは早く言ってほしかぐらばあ!!?」

セリフを言いかけている途中で横から飛び出てきた大きな円柱型の岩に押しつぶされるリリース。

他の三人も言わずもなが。

『さて私は先に行きますか』

「「「助けてよっ!!?」「「「

+

現在ミリーは大きな石の扉の前にいた。

いかにも何かがありそうな扉である。

「……ですね！」

ミリーは躊躇無く扉を開けてる

「ええっ!？」

そして目の前に大きな影が――

†

――きやああああ!?!？

「ミリーの悲鳴!？」

「いったいなにが!？」

「早く行かないと!?!」

洞窟の奥から響き渡る悲鳴に、ナナは一気に奥へ行こうと足を前に

ぐらっ

「うわぁあ！？ナナ！急に動くな！！落ちるだろうが！？」

何がどうなってこうなったのかはわからないが、現在5人がいるのは断崖絶壁に掛けられた橋の上のちょうど中間くらい。

明らかに不安定な上になぜだがとても長い。

少しでも誰かが焦れば、瞬間に橋は崩れて崖下に落ちることは必須である。

「お、落ち着いて。焦ってもいいことなんて何もありませんわ！」

「冷静沈着ですよ、冷静沈着」

「でも・・・」

ミリーを心配しているナナ。・・・今更感がかなりするが。

『まあ、その時にはミリーさんはこの世にはいないかもしれません
が』

空気を読まないセリエス。

「ミ、ミリー！？」

「わ、バカ！暴れるな！？」

「セリエスも何変なことを言いだすんですの！？」

『・・・てへりんこ』

「「「「「ひびく」」」」」

『ひびく』

ぶちっ

「「「「『・・・ぶちっ?』「「「「

振り返ると、橋の最初の方の縄が千切れている。

「うわぁぁぁぁぁ!?!」

「今回はこんなのばっかですわぁぁぁぁ!?!」

「お、落ちるううううう!?!」

「いつになったら最奥まで行けるんでしょうかねえ?」

『無理な気がしてきました・・・』

ひゅっっっっっっっっっっっ

†

「そうなんですか、ここでもつずっとお宝を守っていたんですか
あ」

がうつ！

あわやミリー危うしと思ったが、ミリーは普通に無事だった。

今はこの宝を守っていた番犬のペスこと、地獄の門番ケルベロス
とお茶を飲みながら話し合っている。

「あれ？でもここって私のお母さんが何かを隠した場所なんじゃない
ですか？」

がうがうつ

「え？ここは千年以上も昔からここにあったある王様の隠し財宝の
隠し場所なんですか？」

がう、がうがう。

「私のお母さんから預かったものが奥にあるので、取りに行くなら
取ってきてもいいが他の物には手をつけないように？そんなこと心

配しなくても私はお母さんの隠した何か以外は入りませんよ」

がう、がうがう、がうがう。

「え、非常出入口が奥にあるので帰るのなら其処から出た方がいい、ですか？ありがとうございます。これから頑張ってお室を守ってくださいね」

がうっ！

なぜ会話が通じるかはさっぱりわからないが、ミリーとペスの会話は終始穏やかであったようだ。

こうしてミリーは母の形見を手に洞窟を出て行ったのであった。

+

高い高いがけを登る五人。

「はあ、はあ。後もう少しだ」

「後もう少しで上に上がれますわ・・・！」

「ミリー・・・」

「はあ、はあ、はあ」

『後もう少しですよ、・・・ん？』

崖を軽々と登っていたセリエスが急に片手を耳に当てる。

「ど、どうしたんだ？セリエス」

『いえ、ミリーさんがどうやら宇宙船に戻ったようなので』

「「「なにーーーー！！？」」「」「」

がらっ

「あ」

第二話 大変だとわかっていてもお金は欲しい（後書き）

「ふふふ」

今ミリーの手の中には星の形をした髪飾りがあった。

「・・・お母さん、ありがとうね」

第三話 バカンスって響きは結構いいよね

今日も今日とて波乱万丈の日々を送るお気楽課。

今回そんなお気楽課は、とあるビーチから話は始まる。

+

燦々と照りつける太陽。

活気あふれる白浜。

どこまでも青い海。

そんな中お気楽課の面々は・・・。

「暑い・・・」

「暑すぎますわ・・・」

暑さに参っていた。

何故お気楽課の面々がここにいるのかというと、話は前日まで戻ることになる。

+

「え！？あのパリーヤですの！？」

「え、マジですか！？」

「そうだ。今回はそのパリーヤまで行ってもらっ」

女性は何の感慨も無くそう告げた。

「エルさん。パリーヤってなんですか？」

どういふことかさっぱり分からないミリーはエルに尋ねる。

「ミリーさん。知らないんですか？」

「えへへへ、……うん」

「ふう、いいですか？ パリーヤという星はですね、所謂リゾート惑星なんです」

「リゾート……惑星？」

「そうです、パリーヤという星は軌道上の関係で1年のほとんどが夏の気候なんです。だからその星は常夏の楽園と呼ばれるリゾート惑星というわけです」

「ふえー、そうなんですか」

「……あまり興味なさそうですね」

エルに説明を求めたわりには興味がなさそうなミリー。

「私ってリゾートとかそういうのってあまり興味ないですよね」

「なら聞かないでくださいよ」

「そこはほら、知ることと知った後のことは別というか……」

少し唇を尖らせて？私少し不機嫌です？とばかりの態度を見せるエル。

「そこ！何を喋っておりますの！とつとと準備をしなさい！！」

「はい？」

エルに対してご機嫌をとろうとするミリーに怒鳴るキリカ。

「えっと、なんの？」

「ふふ、決まっているだろう？」

笑顔になってミリーに向き合つリリース。

「バカンスの準備だぼふおッ！！」

女性にぶっ飛ばされ、柵にぶつかって柵ごと崩れるリリース。

「なにをバカなことをほざいているか。お前たちが行くのはバカンスなどではなく調査だろうが」

「で、でもどうせ行くんだし楽しんで・・・」

棚から這い上がってくるリリースは尚女性に意見する。

「・・・ふむ、其処まで言うのならいいぞ」

「なに！？本当か！？」

「ただし明後日までに解決できたら、の話だ。それまでに解決できたのなら明後日が終わるまで遊んでも構わんぞ」

かなりというか本気で達成不可能な条件を出す女性だが、リリース達がそんなことを気にするわけが無く。

「ハッホー！！」「」

バカ丸出しで喜ぶのであった。

「早々終わる仕事ではないんだがな」

『人間こうはなりたくないですね。私はガイノイドですけど』

+

「で、私たちはそのパリーヤにいるわけなんですけど・・・」

現在ミリーたちがいるのはとある浜辺にある海の家の中。

そこでミリーたちはあまりの暑さに全員だれていた。

「しかし予想以上に暑いな・・・」

「それが今回の任務内容ですからね・・・」

そんなミリーたちが今回請けた任務とは・・・。

「？異常なほどの暑さになっているパリーヤを調査し、その原因を見つけ出し解決しろ？、か」

「今更なगरですが、たった2日で解決できるはずありませんわよね」

「本当に今更ですね」

全く持つて今更の事を言う二人に呆れるエル。

「・・・太陽が接近しているだけなんじゃないんですかあ？」

『それは違います。太陽には何の変化もありません』

「どっつかのか活火山の影響とかはどうなんだ？」

『現在この星にある活火山で星全体に影響を及ぼしそうなほど巨大な物は存在しません』

「じゃあ人が密集しすぎてこんな暑さになったとか？」

『よほど密閉されていない限りそんなことは不可能です。そんな発想しかないとか馬鹿ですかあなた』

「ぐくう」

ガイノイドにすら駄目だしを食らうナナだった。

「とりあえず色々聞き込みするしかないんじゃないんですの？」

「ですね、動くのすら億劫になるほど暑いですけどそれしかないですよ」

「今回はミリーさんに心の底から同意です」

テーブルに顎をつけてだら～つとするミリー。

エルはエルでジュースを飲みながらこくこくと頷いている。

「それでは、一度さんか～い……………」

「「「「『らじゃ～』」「「「「」

～お気楽課捜査中～

「で、何か分かったか？」

2時間の後、再び海の家に戻ったお気楽課。

リリスが集まった皆に何か情報をつかんだか尋ねる。

「じゃあまず私から言いまゝす」

「よし、それでは言ってくれ・・・という前になんだその格好は」

リリスが指摘するナナの格好は、明らかに色々と買い物したりして楽しんだ後の格好だった。

目には先ほどはかけていなかったサングラス。太陽の光を反射してキラんと光っている。

「そ、それを言うなら他の皆さんだって明らかに楽しんだ後じゃないですか!!」

「うっ」

ナナの言うとおり、リリスもキリカもエルもミリーも明らかに常夏ルックに変わっている。

『もちろん私は遊んでないで調査していましたよ』

「嘘は駄目ですよ？明らかにさっきとは使っている燃料が違う気がします！」

『うっ、どうしてミリーはこういつ時だけ変に鋭いんですか・・・？』

鋭く指摘するミリーに怯むセリエス。

本当に変なときにだけ鋭いミリーである。

「・・・だって、セリエスのことだもん。私には、分かるよ」

『ミ、ミリーさん……。私実は、ミリーさん——いえ、マスターのことが……。』

「セリエス……」

『マスター……。』

そして、二人の唇はそっと近づき——

「なにをラブコメやつとるかあああああああ!!?」

『うきゃう!?!?』

「えへへ、冗談ですよ」

いきなり目の前で繰り広げられるラブラブ劇場に激怒してテーブルをひっくり返すリリス。

ちなみにキリカは赤くした顔を手で隠し（もちろん指の隙間にご愛

嬌）、ナナは羨ましそうな目でセリエスを見ており、エルはジュースをチューチューと吸っていた。

「ともかくだ！別に遊んでいたのは置いといて集めた情報を出しあうぞ！」

テーブルを元に戻し、強引に話を元に戻そうとするリリス。

先ほどの一番に手を上げたナナはとりあえず喋りだす。

「えっと、どうやらこの星がここまで暑くなり始めたのは2週間くらい前みたいですね。あとその影響でやる気が出ない人が続出、一日の仕事がいつもの3割くらいしか進んでいないみたいですね」

「あれ？ここって観光惑星なのにそういう仕事ってあるんですか？」

ナナの発言に疑問を持ったミリーが尋ねる。

「・・・それじゃあ今ここで私たちに飲み物やらを持ってきている人は一体何をしているんですの？」

「何ってもちろん仕事ですよ？・・・ああ、そういえば仕事ですね納得納得」

「・・・他に誰がいるか？」

ばけぼけのミリーを華麗にスルーして他にいないか尋ねるリリース。

「では私が」

「お、ではエルが分かったことを言ってくれ」

手を上げたエルはジュースをテーブルの上に置き、話を始める。

「どうやら異変があつた2週間前、午後2時くらいにいきなり暑くなったそうなんです」

「なに？何の予兆もなしでか？」

「はい。しかもその日は珍しく気温がいつもよりも低かつたので長袖の人が多数おり、その全員が屋内屋外を問わずに日射病で倒れたらしいです」

「ん？屋内でも？」

「はい。しかもどうしてか屋外で長袖ではなかった者は倒れなかったらしいです」

「それは、また何とも不思議な話ですわね」

「・・・あれ？」

今までおとなしくエルの情報を聞いていたミリーがふと疑問を覚える。

「どうしたんだミリー？」

「いえですね、じゃあどうして私たちは長袖ではなかったのに倒れなかったのが不思議で・・・」

「そのことについてですが、どうやら倒れたのは初日の人のみで後はこの夏の惑星でもなお異常なこの暑さが残ったのみたいです」

「ふえゝ、不思議な話ですね」

『本当ですね』

話を聞いても結局不思議な話ということ以外何も分からなかった。

「それで、他には何か情報はあるか？」

「私は今エルが言ったこと以外に新しいものはありませんわ」

『同じく』

「私はありますよ」

「・・・そうか、誰も他にはないのか」

「無視しないでくださいよ」

手を上げたもののスルーされてしまうミリー。

目が潤んじやう、だってスルーされたんだもの。

「・・・ふう。じゃあミリー」

「はい！あのですね、今回の事件を解決してきました！」

「『『『『・・・へー、すごいね』』』』」

ミリーが解決したというのが当然誰も信じていない。当たり前である。

「あ、信じてませんね？ほんとなんですよ！さっき歩いていたら偶然変な建物を見つけましてね、そこにランニングシャツとパンツー丁のおじいさんがいたんですよ」

「・・・で、どうしたんだ？」

「はい、それですね。そのおじいさんは私が話しかけると？お、おぬしは一体どうやってここを見つけたんじや！？ここは光学迷彩はもちろん人の無意識に働きかけてここには近づきたくないと思わせておいたのに！？こうなったらおぬしを殺してでも、わしの計画

した長袖を着る人なんて滅んでしまえ計画の秘密を守ってみせるわい！！？と言いついていきなりビーム銃を私に向けて発射したんですよ」

「・・・いろんな意味でツツコミ所があるよね」

「で、偶然足元にあつたバナナの皮で転んでしまって、そのとき手に持っていた掃除機がおじいさんの頭に当たってしまったって気絶してしまつたんです。そしたら転んだところに隠し扉がありました」

「・・・なんか妙に現実味があるというかなんというか、反応に困る話ですね」

「扉のなかには下に続く階段がありまして、そこにはやけに大きな機械があつたんです。で、そこにあつた変なボタンを押したら自爆しますってアラートがなつたんです」

「・・・そういえば少し前に原因不明の爆発があつたらしいです」

「「「『えっ！？』『』『』」」」

エルの言つたことに固まつてしまつてしまつてお気楽課。

「それでおじいさんを連れて建物の中から出たんですよ。あ、です。ね。ここからが驚きなんです。がそのおじいさん実は昔政府公認のある研究所にいらしんですが、あまりにも問題を起こしまくつてから逃げた指名手配犯だったらしいんですよ」

『・・・たつた今インターネットに接続して確かめたところ確かにそれらしき人が捕まったらしいです』

「『『『まじで!?!?!』』』」

セリエスから告げられた情報に本気で驚くお気楽課。

そしてミリーはなおも続ける。

「ほんと地元警察におじいさんを預かってくれませんかって言ったときはびっくりしましたよ。捕まえろーっていっぱい警察が押し寄せてきて。それでおじいさんを警察に渡して報奨金をいっぱい貰ってきました」

ほら、と言って懷から大量のお札を出すミリー。

「『『『『・・・』』』』」

それを見て時が止まるお気楽課。

「というわけで解決したことですし、私遊んできますね」

そう言うのと立ち上がって海の方へ走っていつてしまふミリー。

「が？」

「いや、やりきれないなあっと」

「・・・ですよねえ」

・・・。

「「「「『・・・はあ』「「「「」

やりきれない気持ちでいっぱいのお気楽課は、結局まだ時間はあつたもののとても遊ぶ気にはなれないのであつた。

——こうして解決した事件は、後に？ラフな格好の何が悪い！？事件と語り告げられるのだが、正直物語には全く持つて関係ないので割愛。

で、その頃ミリーは。

「やっぱり海は最高です」

一人楽しく海を満喫していたのであった。

第三話 バカンスって響きは結構いいよね（後書き）

帰ってきたお気楽課は、1名を除いて雰囲気は暗かった。

「「「「『・・・はあ』」「」「」

「・・・何があつたんだ？お前らは」

「いや、気にしないで遊べばよかったなあと」

「「「『うんうん』」「」「」

「え？楽しかったですよ？」

「「「「『・・・はあ』」「」「」

「「「？」「」

ちなみにお気楽課に休暇は存在しません。

なぜかって？——問題を起こしすぎだからです。

第四話

大晦日スペシャル

始　く蕎麦は健康にいいんです！ーく

（前書き

今日は今年最後の日ということでスペシャル。

まだ全部で四話しか投稿していないけどスペシャルなんだ。

今年最後にこれを見て笑ってくれたら幸いだ。

今年いっぱいありがとうだ！

第四話 大晦日スペシャル 始ゝ蕎麦は健康にいいんです！ゝ

今日は大晦日。だからというわけではないが、のんびりとした日を送ろうしていたお気楽課。

だがしかし、そんな日に限って依頼が来るのがお気楽課なのだ。

+

ずずーっと何かをすすっている音が響く。

がやがやとバラエティ番組を映すテレビを眺めながら、お気楽課の面々はこたつの中で年越し蕎麦を食べていた。

一応言っておくと、まだ勤務時間である。

「やっぱり、ずずー、大晦日の日に、ずずー、はお蕎麦に限ります、ずずー、よねゝ、ずずー」

『ミリーさんは本当に幸せそうに食べますね』

「だってセリエ、ずずー、スが作ったお蕎麦がおいし、ずずー、んだもの、ずずー」

『ミリーさん……………』

会話しながらも食べることをやめないミリー。

ニコニコと微笑んで幸せそうに食べる姿に癒されているものが若干一名いる中で、キリカが蕎麦の入った器をこたつに置いて、文句を言う。

「……………ずーずーずーずーと音を立てて、はしたないですよ」

「えへへへ。お蕎麦だからいいんですよ」

「そんなわけが——」

「ありますよ」

「へ？」

キリカの言葉を遮って言うのは、すでに蕎麦を食べ終わってじつとテレビを見ていたエルだった。

「もともと蕎麦というのは地球に在ったニホンという国が発祥で、

アズチモモヤマ時代という頃から在ったという物なんです」

「あ。私のご先祖様がその出身ですよ」

箸を口にくわえて手を上げるミリー。

「確かにミリーさんにはニホン人の血が入っていますね。名字も白河ですし」

「名字が白河だとそうなの？」

今の今までテレビを見て爆笑していたナナが疑問を持ったのか尋ねてくる。

「そうですね。漢字を名字に使っていた国は他にもありますが、白河という名字は間違いなく日本独自の使い方です」

「へー、そうなんだ」

「……………それよりも蕎麦のことについて教えてくださいませんか？」

ずれた話を元に戻そうとキリカが話しかける。

「そうでしたね。蕎麦というものは噛まないで食べたほうがいい食

べ物らしいです。何故かというと、噛んで食べると縁起が悪い食べ物らしいからですね」

「っ!？」

エルの言葉に、口に含んでいた蕎麦を思わず嘔き出しまいそうになるリリス。

しかしぎりぎりのところで防ぐことに成功する。

「それは違うよ」

「? 違ったのでしょうか？」

(なんだ、ちがうのか……ふう、嘔き出さずにすんでよかった)

危ないところにいたリリスはミリーの言ったことを聞いて、安心してまた蕎麦を口の中に入れて、もぐもぐと口を動かす。が、

「縁起が悪いのは年越し蕎麦だけですよ」

「ぶーっ!」

ミリーの不意打ちによって嘔き出してしまうリリス。そのせいで前にいたセリエスに食べていた蕎麦が全てかかってしまう。

『…………』ガタッ

「す、すまん。思いっきり何回も噛んで食べていたので今の事を聞いて驚いてしまって嘔いてしまったのだ。決して悪気があったわけでは——」

弁解するリリスの肩を微笑みながらガシッとつかんで一言。

『ちよっと表に出ようか』

ずるっずるっ…………

「ちょ、ま、本当にわざとなんかではないんだ！ひ、引きずるな！ま、まっ——」

ボタン！！ ソ、ソレハデンセツノエクスカリア——ッッ！？

「……………それで話の続きですけど」

「……………そうですね。私たちは何も聞かなかった、それで良いんですわ」

「……………今年一番の怖さだった気がするのは気のせいだったんですよ」

「ちなみに何で縁起が悪いかというと、年越し蕎麦には？細く長く達者に暮らせることを願う？という願掛けみたいなところが含まれているかららしいんですけど……………聞いてます？」

全く空気を読んでいないミリーに、こういうところは本当に羨ましいと思う三人だった。

「とりあえず縁起などは別として」

「無視しないでくださいよ」

「別として。どうして噛まないで食べるかというとですね、どうやら喉越しを楽しみたいんですよ」

「喉越し、ですか？」

「はい、喉越しです。それもあって蕎麦を食べるときにはズズツと

音が立ってしまうのは仕方のないこと、宗教でも蕎麦を食べるときには音を立てて食べるのが当たり前らしかったんです。だからミリーさんが音を出して食べても、はしたなくもなんともないんですよ」

「へ〜。…………あれ？でもそれじゃあ消化に悪いんじゃないの？」

「大丈夫です。蕎麦は消化に関してかなり優れているので問題は全くありません」

「ならいつか。ずずーっ、とね」

エルの説明を聞いて安心したのか、蕎麦を嚙り出す。

「納得は出来ませんが、理解はしましたわ。まあ一年の終わりですものね。少しくらいならいいでしょう」

「その通りです。ミリーさん、御代わりをください」

「はい」

そう言ってミリーに器を渡しておかわりを頼むエル。

どこことなく満足げな雰囲気を感じられたキリ力は思った。

「もしかして、あなたが音を出して食べたかっただけなのでは……」

「……………そんなことはないです」

「？ないんです？ってなんなんですか……………？」

キリカはなぜか今までエルが言っていたことが全て自己弁論なんじゃないかと思った。

「はい、おまたせです。今度はお揚げもサービスでつけちゃいますよ」

「きつね蕎麦ですね……………！」

戦慄してそういうエルは、全身から喜びのオーラが漂っている気がした。

そこがちやっとドアを開いてセリエスが入ってくる。服に赤いものがついてるのは気のせいであろう。

『ふう。いい汗をかきましたよ』

「そんな笑顔で言わないでほしいよ……………」

顔が引きつってしまいうナ。自分が座つているところから、角度的に扉の外が少し見えてしまったのだが、赤い物体が転がっていたの

は気のせいであろう。いや、絶対。

「セリエスも食べませんか？」

『いえ、私はそれほどお腹が空いていないので大丈夫です。それよりもミリーさんに食べていただけたほうが私は嬉しいです』

「えへへ、そう言われたら逆に食べづらくなっちゃいますよ」

「じゃあ私が全部食べちゃいますねー」

「だ、だめですよ！もっと食べるんですから！」

「御代わりです」

「速すぎませんの！？」

こうして賑やかな時が過ぎていくお気楽課の面々（-1）。しかしそこに一人の女性が入ってきたことにより、それは終わりを告げた。

ガチャツと音を立てて扉が開く。

中に入ってきたのは一人の女性――と手に持った何か赤黒い物体だった。

「お前ら、扉の前にゴミを放置すんじゃない。他の局員が怖がって誰も近寄ろうとしなかったぞ」

そう言っただけ女性は何も持っていなかった。それを床に放る。床に当たったときに痛っと言ったような気がするが、それは気のせいである。

『そうですね、ゴミはちゃんとゴミ箱に入れないといけませんでしたよね』

「それが当たり前のエチケットというやつだ」

『なるほど。配慮が足りていませんでした』

アハハと笑いながら話し合う二人。

「お、恐ろしい二人だな……………」

「…………私は無視を決め込んだお前らも恐ろしいよ」

「あれ？生きてたんですか？」

いつの間にか復活してこたつの中にもぐりこんでいたリリス。

さっきまでの傷やらなんやらは綺麗さっぱり消えている。

「まあギャグだしな。早々死ぬわけでもあるまい」

「いえ、死にネタというものもありますから、安易に死なないと思つてますと簡単に殺されますよ？」

「誰にだ？セリエスは本当にぎりぎりのところまでは殺るが、死にはしないぞ？…………死にたくはなるが」

「リリスさんを殺せる人物なんて決まっているじゃないですか。それは——」

「エルさん、おかわり持ってきましたよ」

「ありがとうございます」

エルが誰かの名前を言おうとした瞬間、計ったようなタイミングでミリーが蕎麦を持ってくる。

「だ、誰なんだ？私を殺せる人物は一体誰なんだ？蕎麦なんぞすつてないで早く教えてぶお！？」

「なんてことを言うんですか！？蕎麦を蔑ろにすると天罰が下りますよ？蕎麦の川に流されるみたいな感じの天罰が！」

「私にはためらいなく鳩尾を殴ったミリーそのものが天罰に見えますわ」

リリスがミリーの攻撃によって三途の川に旅行に行ったそのとき、ようやく話が終わったのかセリエスたちがこちらにやってくる。

「ほら、起きろ」

「グフツ！？——はっ！なんか今良い所にいたような………？」

「何を言ってるんだお前？」

あれー？と首を傾げるリリスを置いて、女性は話を始める。

「さて、私がここに来たのは苦情を言いに来たわけでも世間話をしに来たわけでもない」

「え、じゃあまさか………」

「そう、仕事だ」

「マジですかー……………」

女性の言葉を聞いてこたつの上に顎を乗せてだらんとするナナ。

「こんな日に仕事はついていませんね」

「とりあえずお前は手に持ったミカンを置け」

女性の言葉でしぶしぶ持っていたミカンをかごに戻すエル。

「でも今日は私たちにこれといった仕事なんてなかったんじゃないんですか？」

『——はい。記録には確かに今日の仕事は簡単な書類整理だけです。すでにミリーさん、エルさん、そして私は本日の仕事は既に終わっています』

「あら？ミリー、あなた終わってたんですの？」

「え？だってパーっとやってガガーってやればすぐ終わる量じゃないですか」

「……………ちょっとした塔が出来てたはずなんだけどね」

意外にもミリーは書類仕事が出来るということが判明したが、それは今は全然関係ないので仕事について話し始める女性。

「で、本題に戻すんだが、今回の仕事はある惑星に朝を取り戻すことだ」

「朝、ですか？朝昼晩の朝のことですか？」

「その朝だ。どうやらその惑星には3日前から朝が訪れず、ずっと暗い夜のまらしい。だから宇宙局に依頼が来たというわけだな」

「ですが、それでどうして私たちにその依頼が回ってきたんですの？まったくロストテクノロジーに関係なんてありそうにもない話ですのに」

キリカの言葉に少し言葉に詰る女性。

少し苛立った様子で頭をかきながら質問に答える。

「そのことなんだがな、まず第一にこの惑星が結構近いんだ。だからこの支局に任された」

「そうなのか？」

「そうなんだ。そして第二にどうしてこの特別遺失物搜索課なのかというと、どうやらこの仕事にはロストテクノロジーが関わっている事が判明したからだ」

「確かにここはそれ専用とも言っていていいところですが、それならば今まで調査をしていたところが引き続きやった方が早いのでは？」
——「もしや……………」

「そうだ。ようは体よく押し付けられたということだな。どいつもこいつも正月だからといって浮かれてからに……………」

ぶつぶつと愚痴をたれる女性。

なんかちよつとした私情も混じっているのかもしれない。

「却下却下ーっ！それなら私たちだってこんな日に働きたくありませんーん」

「そうだそうだ。第一に私には今日一日はこたつの中でテレビを見て過ごすという遂行な目的があるのだ」

「そうですね。私には今日の夜にちよつとしたパーティーに行かなければなりませんのに」

口々に文句を言うナナたち。

「それこそ却下だ」

「えー？なんでなんですかー……………」

「お前らは日ごろの仕事の量が少なすぎる上に問題も起こしまくっているからだ」

「『『『『うっ』『』『』『』」

「リリース。お前はこの前テロリスト共を殲滅するとか言って倉庫に保管されていたあの剣を持ち出したらしいな。しかもそれで街ごと殲滅して」

「うぐっ」

「ナナミア。お前は仕事中に仕事を放って買い物に勤しんだらしいな。しかも全て宇宙局につけて」

「あっ」

「キリカ。お前はこの前の護衛任務でVIPの顔が気に入らないとかでぶん殴ってから逃げたらしいな。いまだにそこからの電話が絶えんぞ」

「うっ」

「エル。お前は宇宙本局のコンピュータに無断アクセスして局の屑どもを一掃してくれたな。それで済めば何も言わないが、何故全て私の犯行になっっているんだろうな？」

「一番身近で偉かったので、つい」

「給料1年間没収」

「……………はい」

「セリエス。お前はまた無断で改造を施したらしいな。この局がな
んと言われているか分かるか？びっくり箱の地方局だぞ？」――後
で直しておけ」

『……………わかりました』

「で、ミリエーヌ。お前は……………」

「わくわく」

なぜかわくわくしているミリーを見て言葉に詰る女性。

「お前には……………特にこれと言って言うことはないな」

「ええゝ？なんでですかゝ？」

その言葉を聞いて頭痛がするのか頭を抑える女性。

「お前は逆にいろいろありすぎて選ぶ手間すら煩わしい。何だこの
被害報告は。1週間で32件とはふざけているのか？何をどうした
らこんなペースで被害を起こせるんだ。人間台風かお前は」

「えへへ、褒められちゃいました」

「…………褒めてなどいない」

頭を抑えて痛む頭を抑える女性。

ミリー以外の面々は、自分のことを棚に上げて、ミリーに振り回されてかわいそうに思った。

「まあそんなことはどうでもいい。とにかく、何でお前らが行くことになったかは分かったか？」

「まあ、一応は分かりましたけど」

「ならとつと行って、今年最後の仕事をやり遂げて来い。特別遺失物搜索課、さっさと出勤せよ」

「…………了解!」

こうして、お気楽課は任務につくのです。

しかしこのときは誰も想像していなかった。まさかあんなに怖ろしいことになるなんて…………。

続
い
ち
ゃ
う
の

第四話

大晦日スペシャル

始　く蕎麦は健康にいいんです！ーく（後書き

「え？これって続くの？」

続きます。

「冗談じゃなくて？」

本当に続きます。

第五話 正月スペシャル 終 〽これが私の全力全開の思い！〽 (前書き)

この小説は第四話を見てから見ると幸せになります。

第五話 正月スペシャル 終　　これが私の全力全開の思い！――

前回のあらすじ

女「給料ドロボーはこんな日でも仕事なんだ」

皆「給料ドロボーはよくないよね、ホント」

+

「うわゝ、本当に真っ暗ですね」

「一応まだ昼を少し過ぎたくらいなのだがな」

問題の惑星に着いたお気楽課は、本当に暗かったんだと分かり、驚いてた。

「でもこれでは町を少し離れたら、明かりがなくなって大変そうですわね」

この惑星は所謂発展途上惑星というもので、まだ完全には開発されきっていない未開の土地もある惑星なのである。

だから明かりなどのものはまだ町のほうにしか無く、ロストテクノロジー反応が在ったという所は町から大分離れたところにあるらしいので、まさに一寸先は闇状態なのだ。

「あれ？でもそれだったらどうやってロストテクノロジーだって分かったんですか？」

『宇宙船に乗って調べていたら偶然反応が出たらしいです。そのせいでこれ幸いと私たちに押し付けられたわけなんです』

「全く。一体何を思ってロストテクノロジー反応を調べようと思ったんでしょうかね」

「…………一応こういった不可解なものは、まずロストテクノロジー反応を探してから捜査するのが基本ですよ」

「あれ？そうだったけ？」

「はい」

基本的なことも忘れていたナナ。本当に大丈夫なのだろうか？

「それならそれで始めから私たちに任せてくれればよかったのだが。正直いきなり言われてもやる気が出ん」

「まあ、大体の場所が分かっているだけでもいいじゃないですか」

「……………それもそうだな！」

ミリーの言葉に一応納得するリリス。

「それで、どうしてそこにまっすぐ下りなかったんですの？二度手間だと思いますわ」

「反応があつたところは山岳地帯らしいので、万が一ということもありましたからここにしました」

「確かに山に下りるのは大変だからな」

《これは私のことを貶されているのでしょうか。それとただ単に安全を考えた上でのことなのでしょうか……………》

一人不安に思うセリエスの肩にぽんと手を乗せてミリーが一言。

「ぶっちゃんけ不安だったです」

セリエスは涙に沈んだ。

「とりあえずさっさと行きましょうか。では皆さん、これに乗ってください」

「これって、車じゃないですか。何時の間に用意したんですか？」

「ご都合主義をふんだんに使って用意しました」

「……………何でもそれで解決できると思ったら大間違いですわよ？」

「じゃあ行きましょうか」

「早いですわよ！？」——って、いつの間に皆さんが乗っているんですの！？あ、ちょっと、お、置いて行かないでくださいですわー
——！」

「で、ここがロストテクノロジー反応があった場所です」

時間は飛んでついに目的地付近までやってきたお気楽課。

「というか明らかに怪しいこの掘っ立て小屋はなんだ」

「この中にロストテクノロジーがあるじゃないんですかねー？」

目前にあるのはみすばらしい掘っ立て小屋が一つ。

明らかに怪しい。

そこに息を切らせてふらふらになりながら走ってくる一人女性がやってきた。

「はあ、はあ、はあ………！み、皆さん。置いていくなんて、ひどすぎますわ………！！」

「おお、よく走って追いついてこれたな。すごいじゃないか」

「ええ、尊敬します」

「尊敬よりも優しさがほしいですわー！！」

叫ぶキリ力。しかしそれは当たり前のようにスルーされた。

「何はともあれ取り合えず入ってみませんか？」

「ミリーの言うとおりだな。とりあえず入って中を確かめんことはどうにもならん」

『そうですね』

「無視！？無視ですよ！？アウトオブ眼中ですよ！？」

「「「「『うるさい』」」」」

「うるさいって、うるさいってなんですの！？私がここに来るまでにどれだけ苦勞しだらう！？」

ぱんぱんと手を払うリリース。手に赤いものがついているのは「愛嬌」。

「全く、中に人がいてそいつがロストテクノロジーを持っていたらどうするんだ」

「正直それに関しては手遅れですね」

「なに？」

エルに言われて小屋の方を見ると、中から男が出てきた。

「だ、だだだ、だ誰だ、き、ききき貴様らわあああ！？」

出てきたと同時に全身を震わせながら指をお気楽課に向けて指して叫ぶ男。

どう見てもなんかイっちゃってる人である。

「何こいつ？バグってんじゃないの？」

『いえ、心拍は尋常じゃないほど速いですがそれ以外の異常はないので、おそらく究極的に怖がりなのでしょう』

話している内もずっとがくがくと足を震わせ、口から泡も出し始めた男。

やっぱりどう見ても危ないクスリに手を出しすぎた人である。

「ならどうして人前に出ているんでしょうか？」

「そんなことよりも男の左手を見てください。あれ、ロストテクノロジーです」

「ええ！？」

その言葉にバツと男の左手の方を見る面々。

男はビクウツと振るえ、先ほどよりもさらに震えだす。それこそ一人で地震を起こそうとしているんじゃないかと思えるほど。

「あの腕輪がそうなの？」

「はい。あの腕輪からロストテクノロジー反応がビンビンと出えます」

「ビンビンってどうよ………」

「何かいいましたか？ ナナさん」

「んーん、何にも言っていないよ！？」

「ならいいんです」

足を蹴られて痛がるナナを横目に、エルたちは男に向き直る。

「すまないがその腕輪を渡してはくれまいか？ それはとても危険なのだ」

「ただ、ただだ誰が、わ、わた、渡すももんかか、か！」

「直球勝負は駄目だと思います」

『というか少しは考えて喋りましょうよ』

「うるさいな！これが私の精一杯の交渉なんだ！」

「それじゃあ、駄目駄目じゃないですか」

地面にのの字を書いて落ち込むリリス。

「なかなか強力な敵ですね。まさか既に三人もやられるなんて」

「完全に同士討ちですけど………」

『それは言わないお約束ですよ』

「お、おお、お前らああ！？ぼ、ぼぼぼ僕を、むむ、むしす、すするじゃにゅああああいいい！？」

「出来れば理解可能な言語をお願いします」

『ガイノイドでも解析不可能な言葉ですね』

「くすっ」

もはや言いたい放題な三人。エルがボケに回った今、この三人を止められるものなどあんまりいない。

「おお、おおお怒ったたた、たたた、たぞぞおおおおっ!？」

男はそう言つと震える左手を高く上げた。

それに会わせるかのようにピカーンと腕輪が光りだす。

『! いけません。あの男、ロストテクノロジーを使おうとします』

「——なに!? 止めなければ!！」

「あ、リリースさん!？」

セリエスの言葉に復活したリリースは、男に向かって走り出す。

「ま、ままま、ま饅頭ににな、ななななれえええええ!？」

男が叫んだその瞬間。腕輪から発せられた光によって視界が白く染まる。

「うわっ、まぶしいですわ!？」

「光になるうつつう!？」

「バカなことやってないで目を開けてください。光がなくなってきました」

次第に薄まっていく光。そして光がだんだんと薄まってきたときに目を開けたお気楽課は驚いた。

「あれ？リリスさんがいないようだけど？」

「あ、見てください！あれを！」

「ん？ってあれは!？」

その場にはなぜかリリスがもなく、ミリーが指差した方にあつたのは。

「饅頭、ですわね」

「饅頭ですね」

『どこからどう見ても何の変哲も無い普通の饅頭ですね』

「違いますよ！ほら、よく見てください！」

ミリーが持った饅頭をよく見てみると、確かに違つところがあった。

「赤い饅頭ですわね」

「なんとというか中には唐辛子しか入ってなさそうな饅頭ですね」

『あとひらがなで？りりす？と書いてありますね』

「まあかろうじて読めるといっくらい歪な字ですけど」

「でしょう？これ絶対リリスさんですよ」

「『それはおかしい』」「『」

「えゝ？」

ねじが外れまくったことを言うミリーに全員でツッコミをいれる。

「でもでも、現にリリスさんはどこにもいませんし、あの男の人は？饅頭になれ？って叫んでましたよ」

「だからってそんな安着に決め付けるのは……………」

「ぐ、ぐふふふ、ふふ。そ、そその通りだ、だだだあ！」

今まで空気だった男が叫ぶ。

「こ、こここのうう、う腕輪わにわわわ、わなああ！が、ががが願望を上げ、現実にするす、するちち、力ががが、あ、あるんだよおおおお！？」

怖ろしいことを叫ぶ男に、お気楽課の面々は。

「え？冗談？」

「いくらなんでもそれは無いでしょう」

『冗談は存在だけにしてください』

「欠伸が出るほどくだらない話ですわね」

「し、信じてあげましょうよ」

ミリー以外ひどく冷たかった。

まあそんなことを言われてすぐに信じる方もどうかと思うが、これは酷すぎる。

「き、ききききしゃああらあ！？しししんじにやあなああ！？ここ、このわ、わ惑星をを、くくく、くりああくし、ししし、したたのも！！ぼぼぼぼきゅうのし、し仕業なんだだぞおおおう！？」

「……………何て？」

『恐らく？この惑星を暗くしたのはこの僕の仕業なんだぞ？と言っているのかと』

「え？じゃああいつが犯人？」

「ということはこの饅頭は本当に……………」

そう言っつて饅頭をじつと見つめるエル。

「ほら、やっぱりこれがリリスさんなんですよ」

「とりあえず一口食べてみましょうか」

「あ」

ぱくつと一口かじるエル。

固まった空気の中、ひとりもぐもぐと食べる。

「……………こしあんですね」

「こ、？こしあんですね？じゃないですよー！？何で食べちゃったんですか！？リリースさん死んじやいましたよ！？」

残った饅頭を急いで取り返すミリーは、口についたあんこを手で拭き取るエルに向かって叫ぶ。

こんなことでメンバーが欠けてしまうとは、いろいろな意味で予想外である。

「なんちゃって、本物はこちらです。今食べたのはたまたま持っていた似た色をした饅頭だったんです」

「へ？」

そう言つて懷から赤い饅頭を取り出すエル。

なんで持っていたのかは分からないが、驚かせてくれるものである。

「よ、よかった」

『……………これ、確かに赤いですけど、文字が書いてませんよ』

「え？」

エルの持つている饅頭を見る。

どこにも？りりす？と書かれていませんでした。

「……………」

今度は食べかけの饅頭を見える。

少し欠けているが、明らかに？り？の右半分と？す？の文字が書かれていた。

「……………」

沈黙。実際に饅頭にした男ですら呆然としている。

「……………間違えちゃった、てへ」

「間違えちゃったじゃないですよ！？そんな初めて見るとても可愛い笑顔で言われても誤魔化せませんからね！？」

「惜しい、とても惜しいライバルを亡くしましたわ」

「感傷に浸らないでくださいよー！」

「本当にろくでもない人だったけど、亡くして初めて分かりましたよ。頼りにしていたんだって」

「良い話にしようとしなくてください！」

言いたい放題の皆に呆れてしまうミリー。

『……………なんでも願いが叶うのならそれで生き返らせてもらえばいいのでは』

「……………それだー！」「……………」

ぼそつと呟くセリエスの言葉にそれだと思ってお気楽課。

「はういい？」

いままで蚊帳の外だったのにいきなり話題の中心に引っ張り込まれてしまう男。

じりじりと近づいていくお気楽課の面々。

[illegible]

†

130

「全く、死ぬかと思ったぞ」

「むしろ本当に生き返ってびっくりです」

「それは私に死ねといっているのか!？」

なんだかんだでリリースを戻すことに成功。

腕輪型のロストテクノロジーも手に入れることが出来、一件落着で

ある。

「でもどうしてこいつ何の抵抗もしなかったんでしょうね？」

「さあ？分かりませんわ」

『皆さんが怖ろしかったからでしょうね』

「ですよ〜」

現在腕輪を持っているのはミリー。

男が嵌めていた腕輪を右手に嵌めている。

「じゃあとりあえずこの暗いのを何とかしませんこと？」

「あ、それもそうですね」

キリカの言葉にミリーは左手を腕輪に当ててむむむと唸る。

「太陽さーん！どうか戻ってきてくださーい！ー！」

両手を頭上に上げて叫ぶミリー。

その瞬間、腕輪が眩い光を放つ。

「またですよ!？」

「目がああ、目がああああ!？」

『何だかんだ余裕ありまくりですよね皆さん』

次第に光が晴れてくる。そして丁度そのとき。

「あ、見てください!」

「ん?.....あれってまさか」

暗かった世界を徐々に明るい世界にしていく太陽の光。

それが図ったように山から徐々に姿を現してくる。

光に照らされて草木がきらきらと光り、皆を照らしていく。

「わあああ。綺麗ですう」

「本当、ですわね……………」

「心が洗われるようですね」

「なんか、圧倒されちゃいますね……………」

「ああ、全くだな……………」

『これが、初日の出ですか……………』

今の時刻は5時少し前。

ちょうど初日の出が出てくる時間であった。

奇跡が起こったみたいにぴったりとした時間で出てきた太陽に、五人と一体は心のそこから感動していた。

「……………まあ、こんなものを見れるのなら、この任務についてよかったと本当に思うなあ」

「そうですわねえ。めんどくさいとは思いましたが、パーティーに行っていたらこんなに素晴らしいものは見れなかったですものね」

「今年の私は大きくなれそうな気がしますよー、本当に」

「それは万に一つも無いでしょうですけど「ちよつと！」本当に幻

想的な光景ですね」

『というかもう新年を迎えていたんですね』

「そんなに時間が経っていない様で結構経っていたんですね」

太陽を眺めながらぼーっとする四人と一体。

——ん？四人？

「あれ？ミリーはどこに行ったのかな？」

「ん？おい、あれを見る！」

リリスが指差すのは山の上の方。

そこを目を凝らしてみると、そこにいるのは両手を頭上に上げているミリーの姿があった。

「ま、まさかあいつ……………！」

「しくじりましたわ。腕輪の存在をすっかり忘れていましたわ……」

「ミリー……何も言っなよー！？ぜったいに何も言っなよー！！」

『ちょ、それは――』

「わかりました――！！何か言って願いをかなえろって事ですね――！！」

「完全なフリですね。本当にありがとうございました」

「あ、あるえー？」

「フリじゃな――い！！フリじゃないぞミリー――っ！！」

「腕輪よ――！私の願いを叶えたまへ――ッ！！」

ピカ――ッ！！

腕輪が光を放つ。

願いを叶えた証拠だ。

「これがミリーフラッシュの力か……………!!」

「今までの比じゃないくらいの輝きですわ!」

『何を願ったのでしょうか……………』

そして光が収まる。

しかしこれといって変化が無かった。

「……………不発、なのか?」

「いえ、違います。耳をすませてみて下さい」

「耳を?」

耳に手を当て、音を拾おうとする皆。

ミリーの背後から流れ出すのは白くて長い何か！

しかもそれが後から後から湧いてくる。

それはミリーを流しながらこちらの方までどんどんやってきて、逃げる間などあるはずも無く、お気楽課は白い何かに飲まれてゆく。

「うわあああああ！？——ってこれ蕎麦じゃん！？蕎麦臭がすごいんだけど！？」

「…………蕎麦だと？」

そのとき、リリスにミリーが言ったある言葉が思い出された。

「ミリー！お前まさか……………！！」

「はい！これぞまさに蕎麦による蕎麦のための蕎麦にしか出来ない蕎麦の天罰です！！」

「あ、あほかぁ————！！」

リリスはミリーの脅威の実行力に度肝を抜かされた。

「もぐもぐ。これ意外とおいしいですよ」

『こんなときでも食べるあなたがチャンピオンですよ……』

「むしろこんなにあると逆に吐き気しか湧きませんわ……」

こんな時でも食べるエルに、キリ力は吐き気を隠せない。

「でもとりあえず皆さんに言っておくことがあります。」

「今度は何だミリー………?」

いい加減うんざりした様子で聞くりリス。

「決まってます。新年なんだからあれを言っに決まっています」

「バカかお前は!?!こんなときに新年の挨拶など出来るか!?!」

「それでは皆さん!一緒に!」

「「「「『あけましておめでと〜い』」」」」

「なんで揃って言えるんだぶっ」

急に蕎麦に襲われて埋もれてしまうリリス。

そんな中、リリスは心の底からこう思った。

（本当に散々な年初め。本当にあけましておめでと〜だよバカヤロ
——ッ！！）

第五話

正月スペシャル

終

くこれが私の全力全開の思い！ーく

（後書き

「あれ？あの腕輪失くしちゃったみたいですよ」

「え、まじで？」

『……………あんな物はどこにも無い方がいいと私は思います。かえってこれでよかったのでは？』

「まあそうかもしれないけどさ。至少くらい何か叶えて貰いたかったなあーと思って」

「今更言っても詮無きことです」

「それもそうだな」

アハハハハハハ

「あれ？あの男は？」

「……………すっかり忘れてた」

男は後でスタッフ（宇宙局）がちゃんと回収しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6868o/>

銀河お気楽伝説

2011年10月8日04時20分発行